

# 土から 死生を考える

第4回 (最終回)

## 1億年後への贈り物

京都造形芸術大学 教授 原田 憲一



先に、人間の死は「将来世代」を生かすと書いた。だが、多くの若者は、自分だけが生き抜いたとしても、いずれ地球が壊れて人間は絶滅するという悲観論に苛まれている。しかし、それは誤解である。地球は、決して壊れることなく、あと5億年以上は生命の星としてあり続ける。そして、わずかに20万年前に出現した人間（ホモ・サピエンス）は、動物の種の平均寿命からすれば、まだ250万年もの余命を持っているのである。

人間の最大の特徴は、美しさや楽しさを造形表現できることにある。たとえば、チンパンジーに筆と絵の具を与えれば、抽象画のようなものを描く。しかし、筆運びは一方向に動かすブラッシングであって、丸や角は描けない。一方、人間ならば誰でも具象画を描くことができるし、粘土で器を形づくることができる。手足でリズムをとって、踊ることができるし、歌を歌うこともできる。人間は、生命史上初の芸術家なのである。

人間の体制（ボディプラン）——身体先端に乗る顔には目と耳が2つずつで、鼻と口が1つずつ、そして身体には手足が2本ずつ——は、5億年前に出現した魚から、両生類、爬虫類、哺乳類へと受け継がれてきた。高度に発達した脳も、基本設計は魚の脳と同じで、そこに爬虫類と哺乳類の脳が順に積み重なってできている。そして、魚から人間へと進化する過程で、5回もの大量絶滅が生じたが、地球は決してアメーバの世界に戻ることはなかった。たとえば、6500万年前の白亜紀末の恐竜絶滅が、新生代における哺乳類と鳥類の大繁栄の幕開けとなったように、大量絶滅が生じたたびに、新しい生き物が出現して、生態系はより豊かになった。したがって、人間がいかなる理由で絶滅しても、地球が「球形の荒野」と化すことはない。むしろ、絶滅から数千万年後、遅くとも1億年後には、人間よりも高度な脳をもつ動物が新たに出現する、と予測できるのである。

ところで、現在の海底にはゴミと化したプラス

チック製品、武器や兵器の残骸などが散らばり、堆積物には有害な化合物や放射能、重金属などが異常な濃度で含まれている。こうした環境破壊と戦争の証拠は海底に埋もれて一種の化石となり、何億年も地層中に保存される。だが残念なことに、人間の本質を示す芸術作品は海底のどこにも見当たらない。

そこで、提案したいのが「美の化石美術館」である。具体的には、1億年後には海底が陸上に隆起すると予測できる海域を幾つか探し出し、それぞれの海底に、数多くの芸術作品を緻密な粘土で密封して沈める。すると、作品は化石化して地層に保存され、1億年後に「美の化石」として地表に露出する。

その時代に生きる動物は人間以上の知性を持つので、必ず地層を調べる。出自を知るには、地球史の復元が唯一の方法だからである。そして、恐竜絶滅から6500万年後に人間が恐竜化石を発見して感動したように、彼らも地層に眠る「美の化石美術館」の扉を開いて、「人間とは何か」、「人間はいかに生きたか」を雄弁に物語る収蔵品と出会う。そして、生命史上初の芸術家が持った「美を求める心」と「美を表わす手業」に感動するだけではなく、遠い未来の友人に贈り物を届けようとした思いやりの心にも深く感謝することであろう。

この世に生まれ出た個々人の人生が子孫の心を育てるように、生命誕生後38億年目に出現した人間の消長は、遠い未来の仲間を豊かにする。若者には、個人の死生と種の絶滅の意義を理解したうえで、人間が果たすべき生命史的な使命とは何か、を考えてもらいたい。そして、若者らしい志を立てて、人生を美しくたくましく生き抜いてもらいたい、と心から願うのである。

### 原田 憲一 (はらだ・けんいち)

1946年生まれ。京都大学大学院博士課程修了（理学博士）。1980年山形大学理学部地球科学科・助教授、1995年教授を経て、2002年より現職。専門は地質学。著書は『地球について』（国際書院）、『地学は何ができるか』（愛智出版）など。